

# 明代初期の八股文について (7)

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (7)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## (四) 景泰年間

### 丘濬

丘濬（字は仲深，号は，諡は文莊。廣東瓊山の人。永樂十六年〔一四一八〕～弘治八年〔一四九五〕。景泰五年甲戌科〔一四五四〕二甲一名の進士）は，進士及第の後，庶吉士に改められ，編修を授けられる。成化元年（一四六五），反乱の鎮圧について対策を提出し，認められる。侍講，そして侍講學士に進む。『續通鑑綱目』が完成すると，學士に擢せられて，國子祭酒に遷る。『明史』によると，この時，受験用の文体を正したという。

時に經生の文 險怪を尚とぶ。〔丘〕濬 南畿の郷試<sup>つかさど</sup>を主り，〔また〕會試を分考し，皆な痛く之を抑う。是に及び，國學生に課して尤も諄切告誡（誠に忠告）し，文體を正に返す（『明史』卷一百八十一・丘濬傳）。

そして，禮部右侍郎に進む。弘治帝が即位すると，禮部尚書に特進し，詹事府の事を掌る。弘治四年（一四九一），太子太保を加えられ，つづいて文淵閣大學士を兼ねて，機務に参与する。弘治六年（一四九三）には，眼疾を以て朝參を免ぜられる。性格は偏狭であったようで，王恕とはまったくそりが合わず，一言も交わさなかったという。また，王恕が辭職することになったのも，丘濬に由来するという。『大學衍義補』の著者として有名である。

俞長城は次のように評価する。

天地を彌綸する之れ才と謂う，古今を囊括する之れ學と謂う。詞章は才に非ざるなり。鉅釘（文の羅列）は學に非ざるなり。余（俞長城） 丘瓊山

(丘濬) 先生の著す所の『世史正綱』・『大學衍義補』の諸書を視るに廣博浩瀚なり、然れども皆な義理を明らかにし、時務に切に、上下を縦横し、經を以てし緯を以てするは、才と學とを兼ねるに非ざれば、其れ孰れか之を能くせん。時文に至るに才有りて才を恃む可からず、學有りて學を誇る可からず。試みに公(丘濬)の制義を讀むに又た何ぞ其の謹嚴深厚にして繩尺を踰えざらんや。明の初めに當りて、文章 古樸にして、草昧 未だ開かれず。公(丘濬) 國子の「斐然として章を成す」(『論語』公冶長)を教習す。乙未(成化十一年〔一四七五〕)、主試たりて、文恪(王鏊)を得て以て南宮(會試)に冠たらしめ、文正(謝遷)を得て大廷(殿試)に魁たらしむ。「雲漢 昭回し」(『詩經』大雅・雲漢)、「光華復旦」(『尚書大傳』)す。『易』(賁卦彖傳)に曰く「人文を觀て以て天下を化成す」と。丘瓊山 其れ之に近きか(俞長城「題丘仲深稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之三・二十九葉～三十葉・「丘仲深稿」条)。

拙稿では、『欽定化治四書文』で、

註に照らして「性」字を補出し、題の典要を疏す。確として易うる可からず。其の體 直方にして以て大にして①、眞の經解なり(『欽定化治四書文』上孟・十葉・「父子有親 五句」条評語)。

①『易』坤卦・文言傳に「直其正也。方其義也。君子敬以直内。義以方外。直方大」。

と評される八股文を検討してみたい。題目は、『孟子』滕文公上の、

后稷教民稼穡，樹藝五穀，五穀熟而民人育。人之有道也，飽食煖衣，逸居而無教，則近於禽獸。聖人有憂之。使契爲司徒，教以人倫。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信。放勳曰，勞之來之，匡之直之，輔之翼之，使自得之，又從而振德之，聖人之憂民如此，而暇耕乎(『孟子』滕文公上)。

[朱注]……人之有道，言其皆有「秉彝」(『詩經』大雅・蒸民)之性也。然無教，則亦放逸怠惰而失之。故聖人設官而教以人倫。亦因其固有者而道之耳。『書』(皐陶謨)曰，「天敍有典，勅我五典，五惇哉」。此之謂

也……。

太字で示した箇所である。

有自然之人倫<sup>①</sup>，有本然之天性<sup>②</sup>，  
蓋天之生人，有是物必有是則也<sup>③</sup>，隨在人之倫而各盡其天性<sup>④</sup>，何莫而非其所固有者哉，  
昔者孟子闢許行竝耕而治之說<sup>⑤</sup>，因舉聖人，使契爲司徒，教民以人倫之事<sup>⑥</sup>，而詳其目如此<sup>⑦</sup>，蓋以人之生也，莫不有父子君臣夫婦長幼朋友之倫<sup>⑧</sup>，亦莫不有仁義禮智信之性<sup>⑨</sup>，

①『孟子』滕文公上に「人之有道也，飽食煖衣，逸居而無教，則近於禽獸，聖人有憂之，使契爲司徒，教以人倫，父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信……」。『孟子』滕文公下・「以母則不食，以妻則食之」条の朱注に「范氏曰，天之所生，地之所養，惟人爲大，人之所以爲大者，以其有人倫也……」。

②天性：『孟子』盡心上に「孟子曰，形色，天性也，惟聖人，然後可以踐形」。朱注に「人之有形有色，無不各有自然之理，所謂天性也……」。

③有是物必有是則：『詩經』大雅・烝民に「天生烝民，有物有則」。『孟子』盡心上に「孟子曰，形色，天性也，惟聖人，然後可以踐形」。朱注に「楊氏曰，天生烝民，有物有則，物者，形色也，則者，性也，各盡其則，則可以踐形矣」。

④隨在人之倫而各盡其天性：題目に「使契爲司徒，教以人倫」。朱注に「故に聖人官を設け教うるに人倫を以てす。亦た其の固有なる者に因り，之を道びくのみ」。

⑤許行竝耕而治：この題目を含む一節に「〔許行の信奉者となった陳相が孟子に〕道許行之言曰，……賢者與民竝耕而食，饗食而治……」とあり，孟子がこの議論に反駁を加える。題目はその反駁の部分にあたる。なお，「許行之言」を朱子は「許行此言，蓋欲陰壞孟子分別君子野人之法」と注している。

⑥使契爲司徒教民以人倫之事：①参照

⑦蓋以：『舉業辨字』（不分巻・接語辭第二・六葉）に「上文を原ねて其の説を順推するの辭」。

⑧父子君臣夫婦長幼朋友之倫：①参照

⑨仁義禮智信之性：朱子「大學章句序」に「蓋自天降生民，則既莫不與之以仁義禮智之性矣」。

①  
是故

相生也而爲父子，有父子則，有仁之性焉，有仁之性，是以爲父而慈，爲子而孝，油然親愛之無間也，

相臨也而爲君臣，有君臣則，有義之性焉，有義之性，是以爲君而仁，爲臣而

忠，藹然道義之相合也，<sup>④</sup>

①是故：『舉業辨字』（不分卷・接語辭第二・三葉）に「上文を指して之を推原するの辭」。

②油然而：『孟子』離婁上「孟子曰、仁之實、事親是也、義之實、從兄是也……」節の朱注に「事親・從兄之意、油然而生、如草木之有生意也」。

③親愛：王汝驥の『明文治』（雍正元年〔一七二三〕序『明文治』不分卷・上孟・「父子有親 五句」条）は「愛親」に作る。

④道義之相合：『孟子』公孫丑上「其爲氣也、配義與道、無是餒也」条の朱注に「……義者、人心之裁制、道者、天理之自然、……言人能養成此氣、則其氣合乎道義、而爲之助……」。

以言乎夫婦，則男正位乎外，女正位乎内，<sup>①</sup>判然内外之有別也，<sup>②</sup>而其所以別也，非人爲之也，乃其固有之性之智也，

以言乎長幼，則兄友而弟恭，<sup>③</sup>長惠而幼順，<sup>④</sup>秩然先後之有序也，而其所以序也，非人強之也，乃其固有之性之禮也，

①男正位乎外，女正位乎内：『周易』家人・彖傳に「彖曰、家人、女正位乎内，男正位乎外」。

②有別：題目『孟子』滕文公上に「人之有道也、飽食煖衣、逸居而無教、則近於禽獸、聖近人有憂之、使契爲司徒、教以人倫、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信……」。

③兄友而弟恭：『春秋左氏傳』文公十八年に「舉八元使布五教于四方、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝、内平外成」。

④長惠而幼順：『禮記』禮運に「何謂人義、父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、十者謂之人義」。

以至於與朋友交，言而有信，<sup>①</sup>久要而不忘，<sup>②</sup>患難以相恤恪，<sup>③</sup>然彼此之交孚者，<sup>④</sup>何莫非其性中固有之信哉，<sup>⑤</sup>

有之而不能以自盡，所以不能無待於聖人命官之教焉，<sup>⑥</sup>然其所以教之者，亦豈<sup>⑦</sup>能有所增益於其間哉，

①至於：『舉業辨字』（不分卷・接語辭第二・七葉）に「上文に跟着て之を推引するの辭」。

②與朋友交，言而有信：『論語』學而に「子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣」。

③久要而不忘：『論語』憲問に「……曰、今之成人者何必然、見利思義、見危授命、久要而不忘平生之言、亦可以爲成人矣……」。朱注に「久要、舊約也」。

④交孚：『論語』子張・「子夏曰、君子信、而後勞其民、未信、則以爲厲己也、信而後諫、未信、則以爲謗己也」条の朱注に「信、謂誠意惻怛而人信之也、厲、猶病也、事上使下、皆必誠意交孚、而後可以有爲」。

⑤李光地の『程墨前選』（不分巻・八葉）・王汝驥の『明文治』（雍正元年〔一七二三〕序『明文治』不分巻・上孟・「父子有親 五句」条）・『可儀堂一百二十名家制義』には、「論而至是、則知父子之親也、君臣之義也、夫婦之別也、長幼之序也、朋友之信也、皆所固有者也」句がある<sup>①</sup>。

⑥所以教之者：『孟子』盡心上に「孟子曰、君子之所以教者五、有如時雨化之者、有成德者、有達財者、有答問者、有私淑艾者、此五者、君子之所以教也」。

⑦豈能：『舉業辨字』（不分巻・接語辭第二・十葉）に「能わざるを反言するなり」。

亦惟因其固有者而道之耳<sup>①</sup>,

①因其固有者而道之耳：題目の『孟子』滕文公上の朱注に「……故聖人設官而教以人倫、亦因其固有者而道之耳」。

噫<sup>①</sup>、聖人憂民失其所固有、而命官以教之也如此、尚何暇於耕乎<sup>②</sup>（『欽定化治四書文』上孟・十葉・「父子有親 五句」条）。

①噫：『舉業辨字』（不分巻・歎語辭第六・三十二葉）に「痛傷する所有るの辭」。

②何暇於耕乎：題目の下截された『孟子』滕文公上に「……聖人之憂民如此、而暇耕乎」。

明の張居正の『四書直解』は、この章全体を次のように直解している。

后稷は是れ農を勸むるの官。樹藝は是れ種植なり。司徒は是れ民を教うるの官。放勳は是れ帝堯の稱號なり。勞は是れ慰勉なり。來は是れ引進なり。「匡」字は「正」字に解作す。振は是れ警省<sup>い み</sup>の意思。徳は是れ恵を加う<sup>①</sup>。孟子 堯・舜の民を憂うの事を敘して〔以下のように〕説けり。水土 既に平らげば<sup>②</sup>則ち民に耕す可きの地有り。是に于いて、乃ち棄に命じて后稷の官と爲し、之をして「民に稼穡を教え」（『孟子』滕文公上）、耕耘收穫の事を習い、以て五穀を種植せしむ。是に由りて五穀 成熟し<sup>③</sup>、天下の民「家ごとに給し、人ごとに足り」（『史記』商君列傳・『漢書』成帝紀・貢禹傳・王莽傳上）、皆な「相い生じ相い養い」（韓愈「原道」）、阻饑（饑に阻む<sup>なや</sup>）

（1）『程墨前選』（不分巻・八葉）や『可儀堂一百二十名家制義』や『明文治』などには、出比と対比との間に「論而至是則知父子之親也、君臣之義也、夫婦之別也、長幼之序也、朋友之信也、皆其所固有者也」句がある。すると、元來は、提股・中股の部分のみが、対句の形式をとっていたのを『欽定化治四書文』に収録するにあたって、提股・中股・後股の形式にあてはめるために、この部分を省略したのかもしれない。

の患を復する無し④。然らば民 「葬<sup>つね</sup>を秉<sup>と</sup>る」(『詩經』大雅・蒸民)の性  
 有らざるは莫し。若し飽食煖衣して、居處安逸にして、以て之に教うるこ  
 と無からしむれば、又た將に佚豫に耽りて、習いて邪侈を爲し、性を滅し倫を  
 亂すに至り、禽獸に違ふこと遠からず。故に聖人 又た憂い有り。是に於  
 いて契を以て司徒の官と爲し、民に教<sup>ママ</sup>うるに人倫の道を以てす。天下の人  
 をして父は慈に止まり、子は孝に止まり、恩有りて以て相い親しましむ。臣  
 をして禮を以て君に事え、忠を以て義有り、以て相い與からしむ。夫婦は則  
 ち分別有りて相い混淆無し。長幼は則ち次序有りて相い僭越せず。朋友は  
 則ち誠信を以て相い交わりて欺詐有る無し。此の五者は、皆な人の固有す  
 る所の倫なり。必ず法を設け以て之を教え、而して後に民の性 始めて復  
 すなり。然らば其の教えを立つるの方は何如。蓋し帝堯 契に命ずるの辭  
 説に、民に教うるの道は、人に因りて施す。勉強して脩行する者有れば、則  
 ち慰勞して以て之を安んず。一心に道に向かう者有れば、則ち引進して以  
 て之を來らす。其の善を嘉する所以は此の如し。邪僻を制行する者有れば、  
 則ち之を閑<sup>ふせ</sup>ぎ、正に歸せしむ。心を立てて回曲する者有れば、則ち之を矯め  
 て、直に歸せしむ。其の失を救う所以は此の如し。樹立の定まらざる者有  
 れば、則ち扶助<sup>すす</sup>して之を立つ。進脩の前まざる者有れば、則ち誘掖して之を  
 行なう。其の逮ばざるを濟う所以は此の如し。務めて優游厭飫(ゆったり  
 として十分に満足する)⑤して其の本然の性を得ること有らしむ。猶お其  
 の「放逸怠惰」(朱注)にして之を失うを恐るるがごときなり。又た必ず時  
 時に申飭<sup>ていせい</sup>し、提撕(ふるいおこして教え導く)警覺し、以て曲成の恵を加う  
 ⑥。これら多方の造就、教思 窮まり無く⑦、然る後に人倫 明らかにす可  
 し、百姓 親しむ可きなり。堯の契に命ずること此の如し。夫れ水土方平  
 なれば、即ち之を養う所以を思い、衣食 既に足れば、又た之に教うる所以  
 を思う。聖人の心を勞して以て民を憂うるは、汲汲皇皇<sup>あわただ</sup>(『法言』學行)し  
 くして、一日も釋く能わざること此の如し。而るを(先生は「而(なん)  
 ぞ」)耕すに暇あらんや。天下を治むるを説くに耕し且つ爲す可からざる所

以なり（『重刻張閣老經筵四書直解』孟子・卷十八・十八葉「后稷教民稼穡，樹藝五穀，五穀熟而民人育。人之有道也，飽食煖衣，逸居而無教，則近於禽獸。聖人有憂之。使契爲司徒，教以人倫。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信。放勳曰，勞之來之，匡之直之，輔之翼之，使自得之，又從而振德之，聖人之憂民如此，而暇耕乎」条）。

① 滕文公上「又從而振德之，聖人之憂民如此，而暇耕乎」条の朱注に「德，猶惠也……又從而提撕警覺以加惠焉……」。

② 滕文公上「后稷教民稼穡」条の朱注に「言水土平，然後得以教稼穡……」。

③ 滕文公上「五穀不登」条の朱注に「五穀，稻・黍・稷・麥・菽也。登，成熟也」。

④ 『書經』舜典に「帝曰，棄，黎民阻饑，汝后稷，播時百穀」。

⑤ 離婁下「孟子曰，君子深造之以道……」節の朱注に「程子曰，……然必潛心積慮，優游厭飫於其間」。

⑥ 滕文公上「后稷教民稼穡」条の朱注に「……又從而提撕警覺以加惠焉……」。

⑦ 『易』臨卦・象傳に「君子以教思無窮」。

清の『日講四書解義』（康熙十六年（一六七七）刊）は、題目の部分をおのづから次のように解釈する。

……「<sup>つね</sup>葬<sup>と</sup>を乗る」の性は，人皆な之れ有り。若し衣食飽煖・居處安逸にして，以て教えを爲すこと無からしむれば，又た將に佚樂に耽（耽の俗字）り，習いて淫侈を爲して，其の禽獸に去ること遠からざらんとす。聖人 是に於いて又た之を憂い，契をして司徒の官と爲し，民に教うるに人倫の道を以てせしむ。[そして] 天下の人をして父は慈に止まり，子は孝に止まりて，親有り，君 臣を使うに禮を以てし，臣 君に事うるに忠を以てして，義有り，夫 位を外に正し，婦 位を内に正して，別有り，長者は厥の弟を念い，幼者は厥の兄に恭しくして，序有り，朋友の交わりに至りては，則ち「久要にして忘れず」（『論語』憲問）して，信有らしむ。此の五者は，皆な人の共

に由る所の道なり。之に教うるに此れを以てし、然る後に百姓 親しみて五品 遜（したが）うなり①……（『日講四書解義』卷之十七・孟子上之五・滕文公章句上・二十八葉～二十九葉・「后稷教民稼穡，樹藝五穀，五穀熟而民人育。人之有道也，飽食煖衣，逸居而無教，則近於禽獸。聖人有憂之。使契爲司徒，教以人倫。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信。放勳曰，勞之來之，匡之直之，輔之翼之，使自得之，又從而振德之，聖人之憂民如此，而暇耕乎」条）。

①『書經』舜典に「帝曰，契，百姓不親，五品不遜。汝作司徒，敬敷五教在寬」。蔡沈の『書經集傳』に「親，和睦也。五品，父子・君臣・夫婦・長幼・朋友。五者之名位等級也。遜，順也。司徒，掌教之官。敷，布也。父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信，以五者當然之理，而爲教令也……」。

清の『殖學齋編訂四書大全』（雍正十一年〔一七三三〕刊）も，題目の箇所を同じように解釈する。

〔叙講〕……人の「<sup>つね</sup>と<sup>と</sup>堯を乗る」の道有るや，<sup>も</sup>設しし飽食煖衣して，以て之に教うることに無ければ，則ち放逸怠惰にして，其の道に由るを知らず，禽獸に近し。聖人 又た之を憂う。是に于いて契をして司徒の官と爲し，民に教うるに人倫を以てす。父慈子孝にして親しむ有り，君令臣共にして義有り，夫外婦内にして別有り，長先幼後にして序有り，朋友の交わりにして信有り。此の五者は人倫の大なり。必ず法を設け以て之に教え，而して後に民の性復す可きなり。……（雍正十一年〔一七三三〕刊『殖學齋編訂四書大全』孟子卷之三上・三十四葉～三十五葉）。

こうした理解は，朱子の解釈にしたがったものである。この部分に朱子は，次のような注釈をつけている。

……「人之有道」は，皆な「<sup>つね</sup>と<sup>と</sup>堯を乗る」（『詩經』大雅・蒸民）の性有るを言うなり。然れども教え無ければ，則ち亦た放逸怠惰にして之を失う。故に聖人官を設け教うるに人倫を以てす。亦た其の固有なる者に因り，之を



道<sup>みち</sup>びくのみ。書に曰く、「天<sup>(3)</sup> 有典を敘す、我が五典<sup>ただ</sup>を勅し、五つながら惇<sup>あつ</sup>

くせよ（天叙有典、勅我五典、五惇哉）」（皐陶謨）と。此れ之の謂いなり……。人は不易の大道を持っているが、教え導かれることがなければ、禽獣とかわらない。そこで聖人は人倫を教えた。その方法は人が固有するものにしたがわせ導くというものであった。

明末から清にかけての理解は、これと異なった解釈は行なわれていない。明末の曹勳の『四書主意玄碧』（崇禎元年〔一六二八〕序）は、次のように言う。

〔七纂〕 上節は治水の處に于いて獨り詳しくするに、治水の功の艱きを以てするなり。下節は民に教える處に于いて獨り詳しくするに、人倫の世教に関するの大なるを以てするなり。先ず、個の「人之有道也」を吊起す。而して五個の「有」字の自り來る所に下る。然れども空空に五個の「有」字を説くに非ず。君臣に于いて之を教うるに義有るなり、父子に于いて之を教うるに親有るなり、朋友・夫婦・長幼に于いて之を教うるに序有り・別有り・信有るなり……（『四書主意玄碧』十二卷・「有爲神農章」条・十

ㄱ (2) 『孟子』告子上に次のようにある。

詩に曰く、「天 蒸民を生ず、物有れば則有り、民の秉夷なり、是の懿徳を好む」（『詩經』大雅・蒸民）と。孔子曰く「此の詩を爲る者は、其れ道を知るか。故に物有れば必ず則有り、民の秉夷なり。故に是の懿徳を好む」と。

朱子は次のように注釈する。

〔朱注〕詩は、大雅・蒸民の篇なり。「蒸」は、『詩〔經〕』に「烝」に作る。衆なり。物は事なり。則は法なり。「夷」は、『詩〔經〕』に「彝」に作る。常なり。物有れば必ず法有り。耳目有れば、則ち聰明の徳有り、父子有れば、則ち慈孝の心有るが如し。是れ民の秉り執る所の常の性なり。故に人の情 此の懿徳を好まざる者無し。此れを以て之を觀れば、則ち人性の善 見る可きなり……。

(3) 『四書大全』は、輔廣（字は漢卿、号は潜庵。浙江崇徳の人）と陳櫟（字は壽翁、号は定宇。休寧の人。宋・淳祐十二年〔一二五二〕～元・元統二年〔一三三六〕）の『尚書集傳纂疏』（卷一）とを引用して、ここの『書經』の意味を説明する。

〔慶源輔氏曰〕集註 『書』を擧げて以て證と爲す者なり。天叙は即ち所謂ゆる「固有」なり。勅して之を厚くするは即ち所謂ゆる「之を道びく」なり。○〔新安陳氏曰〕典とは、人道の常なり。天の次序する所 本より此の典有るなり。勅は正なり。我は君を謂うなり。五典は即ち父子より朋友に至る五者 是れなり。惇は厚なり。自我を勅正し天叙の本然なる者に即して之を品節す。然る後に典有り。別して五典と爲し、五者 皆な惇厚なり。惇典は人倫を厚くするを言うが如し（『四書大全』孟子大全・卷之五・滕文公上）。

五葉)。

同じく明末の陳組綬(江蘇・武進の人。崇禎七年甲戌科〔一六三四〕二甲三名の進士)の『四書副墨』(明末伊盧刻本)は、

〔八節〕…人倫の五句(父子有親, 君臣有義, 夫婦有別, 長幼有序, 朋友有信)の五つの「有」字は重し。人の性 本より親・義・序・別・信の道有り。其の失うに因りて禽獸に近し。故に之に教えて其の「有」を復さしむ。「有」の教を説く無しに對するは失うに因りて立つるなり…(『四書副墨』滕文公一冊 凡五章・十四葉・「有爲神農之言者許行」章条)。

という。『四書主意玄碧』・『四書副墨』ともに、「人之有道也」と「父子有親, 君臣有義, 夫婦有別, 長幼有序, 朋友有信」とを結びつけて解釈する。

清の『殖學齋編訂四書大全』(雍正十一年〔一七三三〕刊)も、

〔節解〕……「人之有道」は、註の「『<sup>つね</sup>彝<sup>と</sup>を秉る』(『詩經』大雅・蒸民)の性」の說に炤(昭)らかなり。下の五つの「有」字は、正に此の「有」字に應じ、皆な其の固有に因りて、之を導くなり……(雍正十一年〔一七三三〕刊『殖學齋編訂四書大全』孟子卷之三上・三十五葉)。

とする。やはり、朱注の「人之有道, 言其皆有「秉彝」(『詩經』大雅・蒸民)之性也」によって、「人之有道也」と「父子有親, 君臣有義, 夫婦有別, 長幼有序, 朋友有信」とを結びつけて説明するのである。

『四書題鏡』(乾隆三十五年〔一七七〇〕刊)も同じように言う。

道は、須く註の「『<sup>つね</sup>彝<sup>と</sup>を秉る』(『詩經』大雅・蒸民)の性」に照らすべし。下の「父子」・「君臣」等は即ち人なり、「親」・「義」等は即ち道なり。下の五つの「有」は正に此の「人之有道也の」一つの「有」字に應ず。顓蒙(おろか)の人は即ち賢智の人なり。道は豈に離合有らんや。一人の有は千萬人の有なり。道は豈に偏全有らんや(『四書題鏡』上孟・滕文公上・十七葉・「人之句」条)。

また、次のようにも言う。

須く重ねて「教うるに人倫を以てす」句を發すべし。下の五句は正に人倫

を教うるの條件なり。總じて講ずるに亦た先輩の竟に五段に分かつ者有る可し。○「有」字は即ち上の「人〔之〕有道〔也〕」の「有」字なり。是れ教えを待たずして性の中に自ずから有る者なり。但だ氣<sup>とら</sup>拘われ物<sup>おほ</sup>蔽<sup>おほ</sup>わるる中より、之が一一開明を爲し、以て其の有する所を全うするは、則ち教に在り。五つの「有」は、「其の緒<sup>おさ</sup>を理めて之を分かつ」・「其の類<sup>なら</sup>を比べて之を合わす」①の二義を含む。須く「教」字に本づきて來らすべし。若し單に個の「有親」・「有義」・「有序」・「有別」・「有信」を説けば、便ち「使契〔爲司徒〕（契をして司徒と爲す）」の本旨を脱却す（『四書題鏡』上孟・滕文公上・十七葉～十八葉・「使契七句」条）。

①『中庸』第三十二章「唯天下至誠、爲能經綸天下之大經…」句の朱注に「…經者、理其緒而分之。綸者、比其類而合之也。經、常也。大經者、五品之人倫」。

このように、明末から清にかけての解釈は、朱子の注釈の範疇から逸脱したものではない。その意味では、丘濬の八股文も同じように、「人之有道也」と「父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」とを結びつけて説明する。

ただ丘濬は、題目の上にある「人之有道也」と、その朱注の「人之有道、言其皆有秉彝之性也」により「性」を、更にその「性」の具体的な徳目としての「仁・義・禮・智・信」を導き出す。そしてそれを「父子・君臣・夫婦・長幼・朋友」に配当するのである。

人之有道也（『孟子』本文）→性（朱注）→仁・義・禮・智・信

「人之有道也」から具体的な「仁・義・禮・智・信」を導き出し、それを題目にある「父子・君臣・夫婦・長幼・朋友」と結びつけ配当したところが、清朝の人たちに評価された。しかも、その振り分けが『北溪字義』と異なり、より説得力があると考えられたのである。

清朝後期の鄭獻甫（進士となった時の名は存紆、字は小谷。廣西象州の人。道光十五年〔一八三五〕乙未科の二甲二十名の進士）は、『四書翼註論文』（光緒五年〔一八七九〕刊）において、丘濬の八股文をとりあげて、次のようにいう。

「父子有親」の五個の「有」字は、上文の「人之有道」の一個の「有」字より来る。<sup>ママ</sup>邱文莊（丘濬）の程墨は竟に君臣・父子の五倫を以て仁・義・禮・智の五性に配し、以て皆な其の固有する所の者に因りて、以て之が實義を教う。李安溪（李光地）「敝（擦り切れ）ざるの文と爲す」と稱す。王已山（王步青:字は罕皆，号は已山。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年癸卯恩科〔一七二三年〕三甲八十六名の進士）亦た評するに「方員の至り」（『孟子』離婁上）を以てす。按ずるに『北溪字義』（巻上・「仁義禮智信」条）に「夫婦 別有るは便ち是れ禮，長幼 序有るは便ち是れ智」<sup>(4)</sup>と云う。然れども『中庸』に「智の徳は以て別つに足る（智之徳足以別）」①と，程子は「禮は只だ是れ一箇の序」（『河南程氏遺書』巻十八・伊川先生語四）と謂う。則ち北溪（陳淳）は非なり。「其の緒を<sup>おさ</sup>理めて之を分かち，其の類を<sup>なら</sup>比べて之を合わす」② 二句は，是れ「教」字の正解なり。即ち「有」字の來路 單に性理の語を作り，「[契をして] 司徒と爲す」の意を脱卻する可からざるなり（『四書翼註論文』卷之十一・孟子・五十六葉・「神農章」条）。

①『中庸』第三十一章に智の徳にあたるものとして，「文理密察，足以有別也」とある。

---

(4) 朱子の弟子の陳淳（字は安卿，号は北溪。福建漳州龍溪の人。宋・紹興二十九年〔一一五九〕～宋・嘉定十六年〔一二二三〕）の『北溪字義』に，

事物に就きて言えば，父子 親有るは便ち是れ仁，君臣 義有るは便ち是れ義，夫婦有るは便ち是れ禮，長幼 序有るは便ち是れ智，朋友 信有るは便ち是れ信，此れは是れ<sup>たて</sup>豎より觀る底意思なり（就事物言，父子有親便是仁，君臣有義便是義，夫婦有別便是禮，長幼有序便是智，朋友有信便是信，此是豎觀底意思）（巻上・「仁義禮智信」条）。

とある。

また、『性理大全』（巻三十七・性理九・仁義禮智信）も「北溪陳氏曰」として，この発言を引用する。丘濬よりすこし前の薛瑄（字は徳温，号は敬軒，諡は文清。山西河津の人。洪武二十二年〔一三八九〕～天順八年〔一四六四〕。永樂十九年辛丑科〔一四二一〕二甲十四名の進士）も『讀書錄』で，丘濬と同じように，

於春日元，於夏日亨，於秋日利，於冬日貞，其命一也。在父子曰仁，在君臣曰義，在長幼曰禮，在夫婦曰智，在朋友曰信，其性一也（『讀書錄』巻七）。

と述べて，『北溪字義』とは異なる配当を行なっている。

②『中庸』第三十二章「唯天下至誠，爲能經綸天下之大經…」句の朱注に「…經者，理其緒而分之。綸者，比其類而合之也。經，常也。大經者，五品之人倫」。

「父子・君臣・夫婦・長幼・朋友」を「仁・義・禮・智・信」に適切に配当したことを評価しているのである。

実際に丘濬のこの八股分に附された清朝初期の評語は、ほとんどが丘濬の行なった配当を評価している。王汝驤の『明文治』（雍正元年〔一七二三〕序）所引の何焯（字は岢瞻，号は茶仙，また潤千，義門先生と称される。江蘇長洲の人。順治十八年〔一六六一〕～康熙六十一年〔一七二二〕。康熙四十二年〔一七〇三〕癸未科の二甲三名の進士）の評語は次のように言う。

仁と智とは循環するが若し。夫婦有りて然る後に父子有り。文の理 密察にして，以て別有るに足るなり。既に「[夫婦] 有別」と曰えば，則ち性とする所の智と為すこと明らかなり。[しかし]『北溪字義』（卷上・「仁義禮智信」条）に曰く，「夫婦 別有るは便ち是れ禮，長幼 序有るは便ち是れ智」と。然れども程子は「禮は只だ是れ一箇の序」（『河南程氏遺書』卷十八・伊川先生語四）と謂い，既に「[長幼] 有序」と曰えば，亦た當に性とする所の禮と為すべきなり。古人の讀書 通貫す。故に舊説に視<sup>くら</sup>べて推勘すること愈いよ諦（つまびらか）なり何岢瞻（『明文治』不分卷・上孟・「父子有親 五句」条評語）。

何焯は、『北溪字義』の，

父子は仁，君臣は義，夫婦は禮，長幼は智，朋友は信，  
とする配当は，不適切であることは明白であるとし，丘濬の，

父子は仁，君臣は義，夫婦は智，長幼は禮，朋友は信，  
という夫婦と長幼との配当が陳淳の理解と異なっているのがすぐれているというのである。

王汝驤（字は雲衢，又た耘渠と称する。江蘇金壇の人）も次のような評を書いている。

五倫（父子有親，君臣有義，夫婦有別，長幼有序，朋友有信）・五性（仁・義・禮・智・信）①の分配 奇確なり。直ちに註疏に参入す可し。其の「親」・「義」・「別」・「序」・「信」を講ずるに至りては，句句 典切（適切）にして，後人を開きて字義の多少の法門を發揮す（『明文治』 不分卷・上孟・「父子有親 五句」条評語）。

①『白虎通』 卷八・性情に「五性者何。謂仁・義・禮・智・信」とあり，『論語』 雍也・「哀公問，弟子孰爲好學」条の朱注に「[程子] 曰，・其未發也五性具焉。曰仁・義・禮・智・信……」。

題目の「親」・「義」・「別」・「序」・「信」を適切に解釈するだけでなく，五倫と五性とを的確に振り分けているというのである。

李光地（字は晉卿，号は厚庵，別に榕村とも号す。福建安溪の人。明・崇禎十五年〔一六四二〕～清・康熙五十七年〔一七一八〕。康熙九年〔一六七〇〕 庚戌科二甲二名の進士）は，

五倫・五性 劃然確疏なり，斯れ敝（擦り切れる）ざるの文と為す（『程墨前選』 不分卷・九葉・「父子有親 五句」条評語：『制義叢話』（卷一・十六葉）によれば，『程墨前選』は何焯の手定するものであるという）。

と評語を書き，丘濬の五倫と五性との配当を評価する。

俞長城（字は寧世，号は碩園。浙江桐鄉の人。康熙二十四年〔一六八五〕 乙丑科三甲五名の進士）も『可儀堂一百二十名家制義』の評語で，

文に醇雅の氣有り。的確蒼老として，絶えて真西山（真徳秀）に似たり。○夫婦は智に属すとは，從來の創解なり。學者 且に細叅せん（『可儀堂一百二十名家制義』 卷之三・四十葉・丘仲深稿・「父子有親 五句 丘濬」条評語）。

といい，「夫婦は智に属す」というのは創見であると評価する。

このように丘濬のこの八股文に対して書かれた評語には，五倫と五性の配当について，『北溪字義』とは異なる配当を行なったことが評価されているのである。

では、丘濬の八股文は、どのように展開しているのでしょうか。丘濬は、まず破題で「自然の人倫有り、本然の天性有り」とし、承題で「蓋し天の人を生ずるや、是の物有れば必ず是の則有るなり、人の倫在るに随いて各々其の天性を盡くす、何く<sup>いず</sup>に莫として其の固有する所の者に非ざらんや」と承けて、固有の天性のことを議論の中心に据える。

そして、起講で「昔者<sup>むかし</sup> 孟子 許行の並び耕して治むの説<sup>き</sup>を闢け、聖人を擧ぐるに因り、契をして司徒爲らしめ民に教うるに人倫の事を以てす、而して其の目を詳しくすること此の如し、蓋し人の生まるるを以てするや、父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の倫有らざるは莫し、亦た仁・義・禮・智・信の性有らざるは莫し」とし、この八股文の要点をまとめ、父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の倫と仁・義・禮・智・信の性とをとりあげるとする。

提股で「是の故に/相い生ずるや父子と爲り、父子の則有り、仁の性有り、仁の性有り、是<sup>こゝ</sup>を以て父と爲りて慈あり、子と爲りて孝あり、油然而して親愛の間（隙間）無きなり/相い臨むや君臣と爲り、君臣の則有り、義の性有り、義の性有り、是<sup>こゝ</sup>を以て君と爲りて仁あり、臣と爲りて忠あり、藹然として道義の相い合うなり」といい、父子は仁、君臣は義であるとする。

中段で「以て夫婦を言えば、則ち男 位を外に正し、女 位を内に正す、判然として内外の別有り、而して其の別つ所以たるや、人 之を爲すに非ざるなり、乃ち其の固有の性の智なり/以て長幼を言えば、則ち兄は友に弟は恭たり、長は恵に幼は順たり、秩然として先後の序有り、而して其の序する所以なるや、人 之を強うるに非ざるなり、乃ち其の固有の性の禮なり」といい、夫婦は智、長幼は禮であるとする。

後股にあたる部分（『欽定化治四書文』による）で「以て朋友と交わるに、言いて信あるに至るに、久要にして忘れず、患難 以て相い恤格す、然れども彼此の交孚する者、何ぞ其性中の固有の信に非ざるは莫し<sup>(5)</sup> / 之れ有りて以て自ら盡くす能わず、聖人の官に命ずるの教えを待つ無き能わざる所以なり、然らば其の之に教うる所以の者は、亦た豈に能く其の間に増益する所有らんや」といい、出

比で朋友は信であるとする。

収結で「亦た惟だ其の固有なる者に因りて之を道<sup>みち</sup>びくのみ」とし、大結で「噫、聖人 民の其の固有する所を失うことを憂いて、官に命じて以て之に教うることを此の如し、尚お何ぞ耕すに暇あらんや」と結ぶ。

すると、『欽定化治四書文』において、丘濬のこの八股文を、

註に照らして「性」字を補出し、題の典要①を疏す。確として易うる可からず。其の體 直方にして以て大にして②、眞の經解なり（『欽定化治四書文』上孟・十葉・「父子有親 五句」条評語）。

①『易』繫辭下に「不可爲典要」。

②『易』坤卦・文言傳に「直其正也。方其義也。君子敬以直内。義以方外。直方大」。

とするのは、朱子の「人の道有るは、其の皆な「彝を乗る」（『詩經』大雅・蒸民）の性有るを言うなり」という注釈にしたがって「性」の補足をしているだけでなく、五倫（父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信）を五性（仁・義・禮・智・信）に適切に配当しなおしたことも評価しているのであろう。

（つづく）

✓（5）すでに注1で述べたように『程墨前選』・『明文治』・『可儀堂一百二十名家制義』などは、このうしろに、

論じて是に至れば、則ち父子の親なり・君臣の義なり・夫婦の別なり・長幼の序なり・朋友の信なるを知る、皆な固有する所の者なり（論而至是則知父子之親也、君臣之義也、夫婦之別也、長幼之序也、朋友之信也、皆其所固有者也）。

の句がある。父子は親、君臣は義、夫婦は別、長幼は序、朋友は信と説明してきて、ここで「論じて是に至れば」と展開するほうが、順当であると思われる。ただし、そうすると前股・中股・後股という展開でなくなってしまう。